

帝國キネマ映畫

原作並脚色者 原田 幸三

監督者 古海 卓二氏

撮影者 杉山 卓二氏

——主要役割——

新藤郷之助 宮島 健一氏

父友衛 關山 操氏

宮村敬吉 横山 運平氏

妻純子 新澤 葉子嬢

娘君子 森 静子嬢

山田雅夫 岡田 時彦氏

(略) 潮の香り滿つる温い南国の一漁村に平

和な朝夕を親子水入らすの宮村一家に時ならぬ

動搖が起つた。それは近代思想の洗礼を受けて

自分自身を不信任する事の出來ない新藤郷之助

と云ふ青年が都を逃れてこの海岸に投身したの

を救ひ歸つた爲である。それ以來敬吉の頭には

一種の不安が感じられた。それは彼が若い頃都

の或る會社を賦首された時不貞の妻純子が彼を

捨てたの若い男の許に走りやがて其男に純子が

捨てられたといふ當時の追憶から、自分の過去

の若い経験を出し又若く郷之助に娘君子を奪

はれはしまいかと云ふ恐怖を覺えたのである。

その爲に敬吉は二人の身を警戒して居たが敬吉

の心を知る由もない二人は遂に手を携へて家出

して了つた。郷之助は父の許に歸つて事情を告

つた。然し父は郷之助の家出當時の自分の心に

引きくらべて敬吉の心中を察し意見を加へた上

土産物を持たして君子を郷里へ送り歸した。然

し友衛の息は水泡に歸し敬吉は世を果敢なんぞ

既に此世の人ではなかつた。君子の嘆きは新藤

親子を泣かした。田舎に似合はぬ土産の品々

は冷い敬吉の墓前に供へられた。——伊し君子は不幸ではなかつた。彼女は郷之助の新妻として、平和な新郷家へ迎へられ幸福と平和な日々を送る事が出来たのであつた。)

營業價値に立脚せる映畫の多い帝キネ映畫には珍らしい正道を歩んだ映畫である。世界は陳腐であるが親子の心理描寫は誠に好く描き出されて居る。恐麗と助氏の原作脚色は氏の帝キネに於る第一回作品であるが各主役の異なる心理描寫と映畫劇としての脚色法に細心の注意が拂はれて居る。甚だたのしい。今一息の洗練された氏が持ち得たなら貧弱なる我が映畫脚色界の爲め萬丈の氣を吐く時を迎へるであらう。評者は氏の自重を望んでやまない。冗長さと儂監督も侮れぬ技術を發揮して居る。冗長さと儂心を感しやすいこの譚りをこれだけに見せた事は氏の力の興る所も多いと思ふ。俳優では森静子嬢が久し振りで得意の適役で思ふまいに演じて居る。扮装も演技もかうした役には他の追従を許さぬまさか認められる。宮島健一氏の郷之助と横山運平氏の敬吉も眞摯の演技を見ることが出来た。撮影も字幕も美術的に優れたものであつた。

興行價値——眞に映畫劇を理解する者には此映畫の長所を認められ得やうが一般の観客からの喝采を博する事は困難と思はれる。題名も索引力の點から損であると思ふ。

(一月廿一日、大阪芦邊劇場、いろは座)

